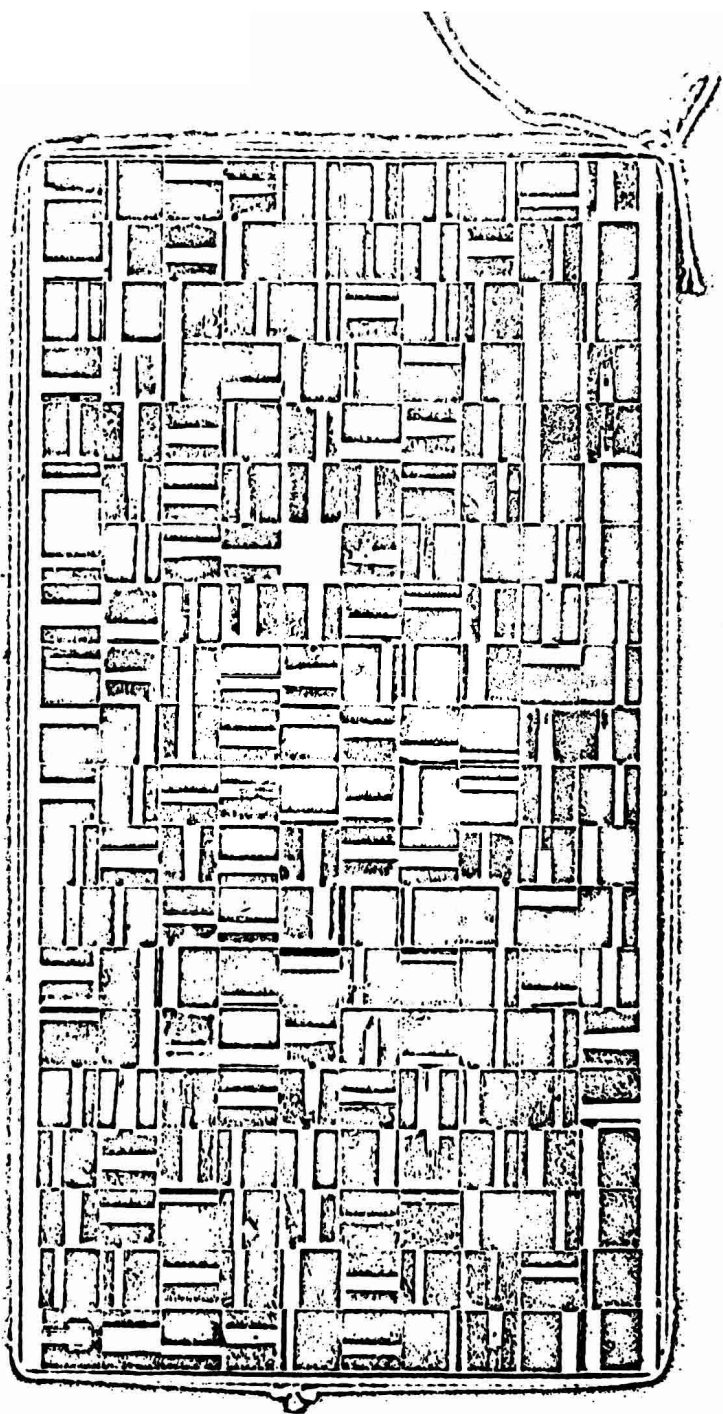


8

鮎川信夫著作集

鮎川信夫著作集 第八卷
近作

発行一九七六年二月二十五日 著者鮎川信夫 装幀粟津潔 発行者小田久郎 発行所株式会社思潮社
東京都新宿区市谷砂土原町三一五 電話東京二六七一八一四一 振替東京八一二一 印刷秀峰美術
製本美成社 製函岡本紙器 用紙北越製紙 表紙クロスダイニック © 1976, Nobuo Ayukawa



目 次

『厭世』その他

偶然の目 10

ぬい子伯母さんを理解すること 16

梵音 26

祖父のなかにあったもの 37

幼年の観察 48

隠れ場所 60

白い馬 63

厭世 67

事実証明書 85

佳景よどこにいる 97

ある邂逅 101

月下美人 110

ドライバーその憂鬱 119

ドライバー ある日の出来事 130

会えなかった人 156

*

清風出立 158

パチンコとゴルフと 162

暗い大きな家 172

凌霜の人 176

私のユートピア 180

富士 183

猫の声 185

小猫との遊戯 189

「詩的青春が遺したもの」その他

詩的青春が遺したもの——わが戦後詩

I	一九三八年四月	194
II	〈私〉の誕生	208
III	ばくち打ちのような影	218
IV	自由な相互批評の場	232
V	もう一人の存在	241
VI	季節はすでに終りであった	253
VII	神戸詩人事件	263

※

『若い荒地』と私	277
詩的自伝として——立風選書『鮎川信夫自撰詩集』	281
『鮎川信夫全詩集』刊行に際して	291
小自伝	295

「時評」その他

批評家の憂鬱

323

悪夢のなかの自由——韓国事情に思う

332

近代の超克——これからは一人

343

W・H・オーデンの死

347

W・H・オーデンを思う

350

中江俊夫の『荒地』時代

353

高見順の詩

356

吉行淳之介論——「暗室」を媒介として

366

未明とえりか

381

解説

深い闇にたつ詩人——吉増剛造

390

*

編集ノート——三好豊一郎

401

掲載誌紙一覧

406

『厭世』
その他

偶然の目

私の最も古い記憶といえ、関東大地震の時のものである。それ以前のものらしい記憶のかげらが無いわけではないが、場所はわかっていても時がいささかあいまいであるし、それに、いずれも断片的なイメージとして存在していて、おぼえていることにどんな意味があるのか判然としない。それで、まとまった記憶となると、私が満三歳と九日目についた関東大地震の際のものということになる。しかし、まとまっているといっても、かなり断片的であることに変わりはない。そのときのことを書きとめようとして、

……………その瞬間は、何が起こったのかわからなかった。烈しい震動がきて、壁がざざーっと崩れおち、箆筒が倒れる音がした。母の叫び声で起ち上りはしたものの、足もとがぐらぐらして、立っているのがやっとであった。一度ぐらゐ転んだかもしれない。母のあとについて、べそをかきながらよろよろと玄関に進んだ……………

と、事の順序にしたがって書くとすれば、これは、記憶というよりは推理にちいかもかもしれない。すっかり動転していたから、どうして玄関まで出たのか、はっきりおぼえていないというのがほんとうのところである。

母は、生れて四、五カ月の妹を抱いていたはずだが、私の手もひっぱっていたのかもしれない。とにかく玄関に出た。といっても、狭い家だから、部屋をとび出せば、すぐ左手が玄関である。

……………私は下駄を穿こうとした。烈しい家屋の動揺の中で、右足にはうまくつかけたものの、左足のほうは裏返しになっていたため、あわてて三和土にかがんで直そうとした。「ゲタがうらがえしたよッ」とか何とかいって、三和土でまごまごしている私に、母は「早くおいで！」と叫んだことだろう。あいにくその時、ひととき猛烈な震動が

きて、玄関内にたてかけてあった三、四枚の張板が、もろに頭上に倒れかかったから、たまらない。私は転倒し、何
が何だかわからずにワアワアと泣き出してしまった……

片方の下駄が裏返しになっていたことと、まごまごしているうちに張板が倒れてきたことは、かなりはっきりした
イメージとして残っている。たとえそれが昨日のことであっても、実際に体験したことと、それについて書くことと
のあいだには微妙なずれがあるものだが、この部分のイメージは鮮明である。

それからどうなったか？ 私は誰か（それはたしかに男だった！）に抱きかかえられて外に連れだされ、家のすぐ
向いの馬車道になっている街道で、ちょっと担ぎ上げられるような格好になった。そのとき、上体が男の肩のところ
で折れて、片方だけの下駄が脱げ落ち、馬車の轍の跡でえぐられて鎗のように盛りあがった泥の上に突きささるのが
見えた。「ゲタがおちたよッ」と、あくまでも下駄にこだわって、私はまた泣き声をあげたような気がする。横縞の
鼻緒の色が黒と水色だったことを、おぼえている。しかし、下駄を拾ってもらったという記憶はない。

関東大地震は、大正十二年九月一日午前十一時五十八分に発生した。当時、私の家は、中野駅から高円寺寄りに入
って左折し、鍋屋横町に抜ける道の、駅からはかなり遠いところにあった。大地震が発生したとき、あいにく父は箱根
の岩原邸に向向いていて留守であり、家にいたのは二十歳になったばかりの母と、三歳になったばかりの私と、乳呑
児の妹だけであった。茶色い防腐剤を塗った木造のちゃんや洋館みたいな作りの家であったとおもう。

私が大地震のことをおぼえているのは、それが大きなショックだったことと、たまたま幼児として記憶を持っても
おかしくない年齢に達していたことが重なっていたためであろう。それでも、震災当時のことを憶えていると言
うと、けしからぬ薄笑いを浮べて不思議がる人が多い。あとで両親から聞いた話に子供っぽい想像がまじって捏造され
た偽記憶にちがいないと疑っているようである。

しかし、私はなにも生れたときのことをおぼえていると強弁しているわけではない。三歳になれば、少くとも記憶

に関しては、ある程度の能力を持っているはずである。偽記憶であるか、ないかを確認するたしかな証拠はないけれども、それに肉薄する姿勢をとることは可能であろう。

じつを言えば、大地震の記憶など、私にとって、無臭、無味なもので、それをおぼえていなければならない理由など、何一つ存在しない。その事件が、それ以後の私の生活に何らかの影響を与えたかといえ、これまた皆無といっでよいであろう。だから、おぼえているからおぼえているというだけで、それに何かの意味があるなどとは、ながい間、考えたこともなかった。

大地震の前らしいと思われる記憶のかげらに、次のようながある。すっ裸の男の子が、お尻に短かい竹の棒を挟んで、原っぱをびよんびよん跳ね廻っている。兎の真似をしているらしい。すると、その子を描まえようとして、母親がとび出してきてききあーききあ喚きながら、よたよたと追いまわし始める……その光景がよほど異様なものと映じたか、それとも同じ年くらいのその男の子の自由に、ある羨望を感じたためか、心理学者ならおそらく幼児の性的な抑圧と結びつけて解釈するだろうが、そんな遠い記憶の一かけらの残像と同様、大地震の記憶の一かたまりも、大して意味のない、全く偶発的な出来事に触発された印象であって、それが何かのはずみで幼い頃のイメージの一齣として残ったにすぎないといった程度の、低い関心でしか、私は、それらを思い浮べたことはなかった。関東大震災は、全壊家屋五十%を越えた地区がいくつもあり、東京市内だけでも死者六万人以上といわれたが、死ぬか生きるかは主として運の問題だったから、ようするに生き残ってしまったえばそれですむわけで、ほかのことはあまり問題ではなくなる。

物心がつくようになって、当時の唯一の生証人である母と、大地震のことを話題にしたことも数えるほどしかない。話題にしたといっても、「あの時はすごかったなあ」といった調子で語るくらいである。そこから何かを引出そうとしたこともなければ、記憶の断片を継ぎ合わせようとして、立入って訊くこともなかった。

それが、この頃では少し変ってきたようである。いつ頃からか、はつきり言うことはできない。おそらく、十年に一度くらい、なんとなく震災のことを話題にしてきた日常の経験のうちに、それは徐々に育っていった関心というべきかもしれない。母には以前から、そのことに、あまり直接にはふれたがらないふうがある、と気づいた日からその関心は好奇心にかわっていったようである。といっても、それはさほど強いものではなかったから、またすぐ忘れてしまつて、今日までそのことをあえて探索することもなく過ぎてしまつたのであつた。

すでに書いた部分からして明らかとなお、震動する修羅場の屋内から私を救出したのは、母ではない。では誰なのか。もし私の家が倒壊したとすれば、その人は私にとって大恩人になるはずだが、どんな顔をしていたのか全くおぼえていないのである。近所の人であつたかもしれないし、たまたま訪ねてきた知人だつたかもしれない。あるいは、同居人だつたかもしれない。それが男だつたと感ずるのは、主として馬車道で私を担ぐようにしたいくらいか乱暴な身体のかんじからきているだけで、それも確たる証拠はないのである。

その男(?)に抱かれていたあいだ、私は「おかアちゃん、おかアちゃん」と泣き喚いていたことであろう。その時間は、実際には短かつたのかもしれないが、心理的には非常に長く、それでいて母がどこかで、それもごく近くで、黙つて眺めていたような気がするのである。

実際に妹を抱いた母と出くわしたのは、馬車道の向いの原っぱで、近所の避難人が集まっている所であつた。私は、母のそばへ寄るのが気羞かしくて、ともに顔を上げることができず、何か自分に重大な落度でもあつたようにオドオドしていた。母もひどく不機嫌な様子で、邪慳に小言を口走つたようにおもう。しかし、このあたりの記憶はたしかでない。ある感じとして残っているだけである。私を救出した男(?)は、どこで、どのようにして消えたのか。私を母に渡すと、そのまま立去つていったのだろうか。

記憶のかげから、大地震当日の模様を順序だてて再現すると、大体以上のようになる。約言すれば、母は私を捨

て、生後間もない妹を抱いて逃げ、間髪入れずに誰かが私を救出してくれたということになる。

断わっておくが、私は、「母が私を捨てて逃げた」というかたちで、震災当日の出来事を考えたことは、これまでに一度もなかった。それが不愉快だからというのではなく、その後の日常に照して、そう考えるのはいかにも非現実的だったからであろう。もちろん、どっちにしたところで大した問題ではないということもあったが……

しかし、私は、どこかでとんでもない錯覚をしているのかもしれない。記憶のかけらは記憶のかけらで、それをこんなふうに継ぎ合わせることが、とりも直さず偽記憶につながるものになるのかもしれない。

私を救出した男というの、ひょっとしたら私の勝手な妄想の産物かもしれない。記憶とは、邪悪な財宝であるとか、過去を刻々変えていく策略めいた能力であるとか、言葉巧みに他人からいわれたりすると、そうかなと思ひ、私はたちまち自信がなくなってしまうのである。邪悪も策略も一人前の大人であるとすれば、私の記憶は、どんなに加工され、どんなに変形させられてしまっているか知れたものではないからである。

ロサンゼルスで大地震が起り、その被害が大きく報道された日。

私は久しぶりに地震のことを話題にした。震災後の地震のエネルギーがマグニチュード7・5分たまっているとか、そろそろ水の綺麗なところへでも引越そうやとか、あまり心にもないことを喋べったあげく、大震災のときの模様を話を移していった。そして、いくらか唐突に、

「あのとき、ぼくを連れ出してくれたのは誰なの？」と切り出してみた。

「さあ……」と言って、母は口を噤み、あいまいな表情になり、ちょっと警戒の色を浮べた。

「近所の人？」と、私はかまわず誘導質問をつづけた。

「いいえ……通りがかりの人ですよ。工事が何かで近くにきていたんでしょ」と母はすこし間をおいて怯んだ声で

言い、「あのときは、なにしろ、アキコを抱き上げると、筆筒が倒れるのとはほとんど同時だったからねえ」と弁解するような口調でつけ加えた。

私は「どんな人だった？」と訊こうと思ったが、やめた。そうか、通りがかりの人だったのか、その人には子供はなかったのだろうか、私を母に渡すとき、何かお説教めいたことを言ったのではあるまいか、などとあらぬことを考えはじめていた。

その沈黙を不自然に感じたのか、

「おまえ、何かへんなことを書く気じゃないでしょうね？」と母はこわい顔をして、一本釘を刺すように言った。

大地震当日から一万七千三百 * * 日目にはじめて発した私の質問は、よほど母をびっくりさせたらしい。

私は心から愉快になって大声で笑った。それは、あたかも心理的に無重力の世界に入って、自分がついに何者でもなかったことを発見したような喜びであった。

私にとって、母は、いつも必然の人でありすぎる存在である。しかし、私の記憶が、偶然を滅ぼしていないと知った瞬間、母さえも羽衣天女のように軽くなる。必然的に私を生み、必然的に私を育て、今では必然的にリウマチを持病として立居振舞が不自由になっていた母が、とつぜん重力から解放たれて、みるみるうちに天高く、私の視界から遠ざかっていく。